



三 坂本の部屋にて

坂本は玄関のドアを開け、靴を脱いだ。宮本も真似をして、草鞋を脱ぐ。

「ああ、暑い、暑い」坂本の部屋は熱気と湿度でむんむんとしていた。湯気までは見えないけれど、まるでサウナ風呂だ。部屋の窓は西を向いているから、午後からは西陽が照りつけるのだ。急いでクーラーのスイッチを入れる。温度は二十度、強風の設定にする。最初は生温かい風も次第に冷氣となり、二人の体と心は人が入れ替わったかのように落ち着いた。

「ここはひんやりとしているでござるな。この箱の向こうには森や川があるのでござるか」

宮本はクーラーの吹き出し口の前でうっとりとしている。

「クーラーだよ」と鈴木は答えながら、宮本のことを少し不思議に思いだした。確かに、火事で家族を失い、家も失くしたショックから、戦国時代の落武者の姿に変わったとしても、車を馬だと言ったり、クーラーを知らなかったりするなど、頭の中までも落武者になるのだろうか。宮本は本当に落武者ではないだろうか。

でも、今のこの時代に、何故、落武者がいるんだ。第二次世界大戦が終わったことを知らずに、南の島で何十年も潜伏していた軍人の話を聞いたことがあるけれど、いくらなんでも、戦国時代から今まで生きていたなんてことは信じられない。でも、信じないと理屈に合わない。道理が廢れる。

坂本はようやく体が涼しくなったので、宮本に意を決して直接尋ねてみた。

「宮本さんは本当はいつの時代の人なんですか？」尋ね方によっては、宮本を怒らせてしまうかもしれない。だけど、このまま宮本の氏素性を謎のままにつきあうわけにはいかない。宮本の口から直に聞いてみたかったのだ。

「いつの時代？拙者が今いるのが拙者の時代でござる。と、言わせてもらいながら、実は、戦国時代の武士でござる」と、真面目な顔で答える。

「本当に、戦国時代の武士なんですか？」驚きながらも、やっぱりだと納得し、腑に落ちた坂本。

「武士に二言はござらぬ。と、言いながら、拙者が生きていたのが戦国時代だと知ったのは後からでござるが」

「それどういうこと」

「実は・・・」宮本は訥々と話始めた。宮本は豊臣家の家来の家来のまた家来であった。剣豪宮本武蔵とは遠い親戚らしい。武蔵のように名を上げようと戦に出陣し、先陣を掛け抜けようとしたが、矢を全身に放たれ、討ち死にしてしまったのだ。

可哀そうに思ったのか誰かが宮本の死体を土の中に葬むってくれ、その上に石の三段重ねの墓を作ってくれた。そのまま墓の下で静かに眠っていたが、ある時、誰かがその石を崩して、水がかかったところ、この世に生き返ったらしい。戦国時代からこれまで、江戸時代、明治時代、昭和の時代と数回、生き返ったことがあるらしい。ただし、はっきりとした時代は覚えていないとのことだ。それに、体中から水分がなくなると、元の石に戻ってしまうとのことだ。さっきの車の中で、小さい体型から石になったのは事実だったのだ。

「じゃあ、宮本さんは幽霊なの？」坂本は宮本の話聞いたけれどにわかには信じられない。

「いやあ、幽霊ではござらぬ。ちゃんと足は二本あるでござる。刀も二本差しでござる」

宮本には二本の足と腰には刀が二本が伸びている。確かに、この部屋にも歩いて入って来た。

「じゃあ、妖怪？化け物？」

「うーん。もう少し、ましな呼び方はござらぬか。それに、自分で自分のことを妖怪だと名乗っている妖怪はいないでござる。いずれも、妖怪の承諾もなしに、人間が勝手に名前を付けただけではござらぬか」宮本が腕を組んで思案げな顔をしている。

「そりゃ、そうだけど。じゃあ、なんて呼べばいいのかなあ」

坂本は困ってしまう。

「それじゃあ、「時を駆ける侍」はどうでござるか」

「どこかの小説や映画のパクリだよ」

「うーん。難しいでござるな。宮本でよいでござる」

「それよりも、その体に刺さった何本もの矢は痛くないの？ひい、ふう、みい・・・」坂本は宮本の体に刺さった矢を数える。

「生きていた時は、今も、生きているのでござるが、痛くて大量の血が出たでござるが、今は、慣れてしまって、どうってことないでござる。豆腐にようじを差すようなものでござる。ほら」

宮本は膝に刺さった矢を簡単に抜き、それを坂本に見せると、すぐに元の膝に突き戻す。

「えっ。何も戻さなくてもいいのに」矢が突き刺さった箇所を目を凝らして見つめる坂本。その肌からは血が出ていない。

「いやあ。当初は、この矢は拙者を痛めつけ、死に至らしめたにつくき敵の矢ござったが、四百年以上も一緒にいると、憎悪から愛着に変わってきたのでござる。もう、拙者の体の一部でござるから、いや、拙者といってもよいでござる。嫌も嫌も好きのうちでござる」

宮本は手持ちぶさたなのか自分の体に刺さった矢を抜いたり、差し戻したりしている。

「豆腐にようじねえ。ふーん。そんなものかなあ」

「そんなもんでござる」

「でも、矢が突き出ていたら、邪魔にならない」

「それを考えながら動いているでござる。それにこの矢は特別の力を持っているのでござる」

「どんな力？」

「拙者をこの世とあの世に結びつけている力でござる」

「それどういう意味？」

「体に刺さった矢を抜き、しばらくすると体が消えるのでござる。慌てて、矢を体に戻すと体は再び現れるのでござる。それから、この矢は、拙者をこの世とあの世を結びつけているものだと思っているのでござる」愛おしそうに矢を撫でる宮本。

「じゃあ、その矢がなくなれば、宮本さんは本当に消えてしまうの？」

坂本は疑わしそうな目で坂本を見つめる。

「多分」

宮本は自分に刺さった矢を抜く。全部で十二本。まず、左手に刺さった矢を抜く。左手が消

えた。次に、右膝に刺さった矢を抜く。右膝が消えた。更に、胸に刺さった矢を・・・。

「もういいよ。わかったよ」坂本が宮本の手を掴む。温かい。確かに宮本は生きている。幽霊ではない。

「拙者自身も矢を全部抜いたらどうなるかはわからないでござる。本当に消えてしまうかどうかはやってみないとわからないでござる」

その時、携帯電話が鳴った。

「しまった。連絡するのを忘れていた」坂本は急いで対応する。

「はい。すいません。連絡するのが遅くなって。相手さんと営業の話で盛り上がってしまいました。もう、今日は直帰します。よろしくお願ひします。ふう」ため息をつく坂本。

「何の合図でござる。その箱は味方と話ができるのでござるか」

「ああ、これは。携帯電話だよ」

「電話？以前、現れた時には、黒くて、真ん中に輪と数字があつて、線でつながれていたでござる」

「ああ、黒電話ね。僕も昭和風の居酒屋で見たことがあるよ。でも、僕にとっては昔のことだけど、宮本さんにとっては最近のことじゃないの」

「最近かどうかはわからないでござるが、見たことがあるでござる。拙者が戦の時にその武器があれば、人が走ったり、馬に乗ったりして伝えなくても、よかつたのでござるな。そうすれば、敵の中に取り残されずにすんだし、討ち取られることもなかつたでござる」

唇を噛みしめ、無念そうな顔で天井を見つめる宮本。

「まあ、そうだね。ぐう」返事すると同時に坂本のお腹が鳴る。

「なんと、鈴木殿のお腹にも、味方と話ができる装置がついているのでござるか」

「いやあ。単に、お腹が空いただけだよ」坂本はお腹を触りながら苦笑いをする。

「それは、戦国時代でも、時代が代わつても一緒でござるな」宮本もつられて笑う。

「何か食べる？外に食べに行ってもいいけれど、目立ってしまうからね」

「拙者は、食べられるものならば何でもいいでござる」

「ちょっと待って」

坂本は冷蔵庫を開ける。冷えた空気以外何もない。

「うーん」部屋の中を見渡す。ようやく冷えてきた空気以外何もない。

「そうだ」押入れを開ける。紫色のサブザックを探す。ショルダー部分を持ち、引っ張り出す。中を開けた。ニリットルのペットボトルが二本。カンパンの缶詰が二個。桃の缶詰が二個。カップラーメンが二個。坂本が災害時の非常食用として備えたものだ。どういう訳か、全て二個だ。そう。いつかは、そのいつかがいつ来るのかわからないが、パートナーと一緒に食べることを夢見ていて準備しておいたのだった。その中から、主食のカップラーメンを取り出す。

「お湯を沸かさないと」電子ポットに水を入れ、沸蕩ボタンを押す。お湯が湧く前に、カップラーメンの上蓋の包装を開けて、粉末スープ、かやくを入れ終えた。これで、いつでも準備OKだ。

「何の、食べ物でござるか」宮本が坂本の横に立つと不思議そうにカップを見つめる。

「カップラーメンだよ。お湯を入れるだけで食べられるんだ。さあ、お湯が湧いたよ」
坂本がふつつつと気泡が立つお湯をカップに注ぐ。

「いい香りでござる」宮本が匂いに誘われてか、カップに鼻をつけた。

「あっちっち」カップから急いで離れ、鼻を撫でる宮本。

「体に刺さった矢は痛くないけれど、お湯は熱く感じるんだ」変に納得する坂本。

「お湯とはまだわずかのつきあいでござる。痛くなくなるには、四百年のつきあいが必要でござる」したり顔で宮本が答える。

「それに、このままじゃあ食べられないよ。お湯でやわらかくしないといけないんだ」坂本がカップを引き寄せ、蓋をする。

「蓋でござるか」

「三分間待つてね」

「三分でござるか。三分とはお寺の鐘が鳴る時間でござるか？でも、待つのは慣れているでござる。もう四百年近くも我慢したでござる」

宮本は目をつぶり、石のように黙った。まるで、石の地蔵さんだ。

「そうだ。いいことを思い付いた。できあがる前にビールを飲もう」

坂本は冷蔵庫からビール缶を二本取り出した。プルタブをぷしゅっと開ける。かすかだが泡が噴き出る。この泡は何か月前に閉じ込められたんだろうか。まさか、四百年前ということはないだろう。坂本は日付を確認し、宮本に手渡す。

「どうぞ」

「かたじけないでござる。これは何でござるか」

「ビールだよ。まあお酒だよ」

「酒でござるか。ときどき、石の墓にかけられたことはござるが、飲むのは久しぶりでござる」

「乾杯」

「か・ん・ぱ・い・でござる」

坂本に真似して宮本も缶を合わせる。

ぐび。ぐび。ぐび。ぐび。

「美味しい。すきっ腹にしみるなあ」

「うーん。苦いでござるが、体の芯まで冷えるでござる」

二人とも一気にビールを飲み干した。その間に、三分間がやって来た。

「グウ」「グウ」二人のお腹が返事をした。

「さあ、食べよう」坂本がカップの蓋を取る。割り箸を割り、中をかき混ぜる。宮本も見よう見まねで続く。二人は手を合わせる。

「いただきます」「いただくでござる」

「美味しい」「美味しいでござる」

こうして二人のささやかだが、楽しい夕食は終わった。

「なんだか気持ちがいい」「気持ちいいでござる」

すきっ腹にアルコールが効いたのか、カップラーメンでお腹が満たされたのか、その両方なのか、二人ともソファーに座ったままそのまま眠ってしまった。

「ふあああ」翌日、眼が覚めた坂本。周りを見渡す。宮本がいない。

「あれ、どこへ行ったんだろう」

立ち上がって、浴室やトイレを探す。やはりいない。まさか、落武者は夢だったのか。だが、テーブルの上にはビールの空き缶とラーメンのカップが二個ある。落武者、宮本がいたことは事実だ。夢じゃない。どこかへ行ってしまったのか。じゃあ、どこへ。自分が寝ていたソファーに座る。落武者が座っていた辺りを見た。石があった。三段重ねの石だ。昨日、車の助手席で見た石と同じだ。

「水が、水が欲しいでござる」かすかに声が聞こえてくる。それと同時に石が震えている。

坂本はキッチンでグラスに水を汲むと石に水をかけた。石はみるみるうちに膨張し、人間の姿に戻った。落武者の宮本だ。

「ふう。また、坂本殿に助けられたでござる。命の二恩人でござる」宮本はざんばら髪を振りまわした。髪がかすかに濡れている。

「昨晚、お酒を飲んだ後、おしっこをしすぎたでござる。それで、体中の水分が不足して、石に戻ったのでござろう。もちろん、石になるおかげで、こうして四百年もの長い間、生きていられるのでござる」自分の置かれた状況を分析し解明する宮本。武士というスポーツ系と、理論的な理科系の二つの側面を持ち合わせている。文系の坂本にはない才能だ。うらやましい限りだ。だからこそ、ささやかな抵抗をしたくなる。

「ふーん。長生きするのはいいけれど、石になるのは嫌だな」

坂本はコップに残った水を飲み干した。水は口から喉に、そして胃に、体全体に沁み渡っていく。生きているとはこういう感じなのかもしれない。

「坂本殿は石になったことがないのでござるか。もし、よかったらなってみるでござるか」宮本が正座したままにじり寄ってくる。

「なってみるって、石に？」ハトが豆鉄砲を食らったように目を丸くし、池に石を投げられた亀のように首をすくめる坂本。

「そうでござる」いつでもバトンタッチをしたいような勢いの宮本。

「いや、いいよ」坂本はとんでもないという顔で大きく手を振った。

「それより、今日は、仕事に行かないといけないんだけど、宮本さんはどうする？家にいる？」

「いつまでも、坂本殿のお世話になるわけにもいかないのでござる。だからと言って、どこへいくあてもござらん。前にいた場所からは追い出されたのでござる」

宮本は石となって草むらで眠っていたのだが、道路工事のために追い出されたのだった。

「行くところないのだったら、しばらくはここにいてもいいよ」

「本当でござるか。かたじけない」宮本七蔵は額をソファーに擦りつけるほど、土下座をした。

「そ、そんなことしなくていいよ。頭を上げてよ。出会ったのも何かの縁だし」慌てて、宮本の頭を持ち上げようとする坂本。

「坂本殿はやさしいでござるな。坂本殿のために何かお礼をしなくてはいけないでござる」

「礼なんていいよ。気ままな一人暮らしだから、一人より二人の方が楽しいよ」坂本は実家にいる父と母を思い出した。高校までは三人家族だった。その頃は、父や母がうっとおしくてたまらなかった。早く、家を出たくてたまらなかった。だが、大学生、社会人として、一人暮らしが長くなると父や母や自分の部屋が懐かしくなる。人の思いは不思議なものだし、勝手なもんだ。

「そう言ってくれると、ありがたいでござる。でも、このまま、家にいても仕方がないので、坂本殿と一緒に行くでござる」

「一緒って、その姿で・・・」坂本はハトのような丸い目を更に丸くする。この部屋に宮本を連れてくるときは、会社の余興だとか言って、近所の人をなんとか信用させたけれど、落武者の姿の宮本を連れて、会社に行く勇気はない。それこそ、途中で、警察に職務質問されて捕まってしまうだろう。

「ちょっとそれは・・・」坂本は眉をしかめ、口ごもった。

「坂本殿には迷惑はかけないでござる。ほら、こうして」と宮本が手を合わせると、体中から霧が出てきた。霧の中に宮本がいる。やがて、霧が晴れると、宮本の姿はなく、三段重ねの石ころがあった。朝、見たのと同じ石ころだった。

「長い間、生きてきたので、自分から石になる忍術を体得したでござる。だけど、誰かに水をかけてもらわないと人間の姿に戻れないのでござる」石が体を揺らしながらしゃべっている。

「便利のようで、不便だね」坂本は石になった宮本を背広のポケットに大事に入れると、会社へ向かった。